

ケルト宗教文献目録：PART 2

松村 一 男

昨年のケルト宗教文献目録：PART 1 の補足および両者を合わせた内容索引を、今回、PART 2 として発表する。従来、ケルト学全般の文献目録としては、R.I.BEST (comp.) *Bibliography of Irish Philology and of Printed Irish Literature (to end of 1912)*, Dublin Institute for Advanced Studies (D.I.A.S.) と Id., *Bibliography of Irish Philology and Manuscript Literature*. Publications 1913 - 1941 (repr. 1969), D.I.A.S. とがあったが、いずれも年代的に古くなっているの、前回のPART 1 では言及しなかった。しかし、より最近の文献をカバーするものとして、昨年、Rolf BAUMGARTEN (comp.), *Bibliography of Irish Linguistics and Literature 1942 - 71*, D.I.A.S., 1986 が刊行された。したがって、71年までのケルト宗教に関する文献は、上記3点によってより完全に網羅されているわけで、私のこのささやかな文献目録は、その価値が相対的に減少することとなった。まったく価値がなくなったのではなく、相対的に減じたと考える理由は、以下のようなものである。1) 72年度以降の部分については、上記のような文献目録がアイルランドで刊行されるにはまだなお暫く時間がかかると思われること。2) Best と Baumgarten の文献目録は、完全さを期する余り、僅かでもケルト宗教に言及していれば記載してある場合も少なくなく(特に Baumgarten)、また解題は付されていないので、文献の相対的重要性が俄には判定し難いことがままある。私が今回試みたのは、より限られたitems についてのみだが、内容をある程度知りうるような、つまりよりusabilityの高い文献目録で

あり、その意味では、網羅的な上記3点のアイルランドのものとはやや目的を異にしている。3) 日本語のものも記載していること。

この文献目録を纏めるに当たっては、次の方々から様々な御教示を賜った。厚く御礼申し上げます。(アイウエオ順、敬称省略)：清水重男(早稲田大)、鶴岡真弓(和光大)、James E. MacElwain(文京女子短大)、松村賢一(中央大)、盛節子(文京女子短大)、吉田敦彦(学習院大)。

補足文献

- ARABAGIAN, Ruth Katz 1984: "Cattle Raiding and Bride Stealing: The Goddesses in Indo-European Heroic Literature", *Religion* 14, 107-42.
- BANFORD, Christopher 1981: "The Heritage of Celtic Christianity: Ecology and Holiness" in O'DRISCOLL 1981, 197-216.
- BINCHY, Daniel A. 1958: "The Fair of Tara and the Feast of Tara", *Eriu* 18, 113-38.
- BITEL, Lisa M. 1986: "Women's monastic enclosures in early Ireland: a study of female spirituality and male monastic mentalities", *Journal of Medieval History* 12, 15-36.
- BORST, Karen Gail 1983: "A Reconsideration of the *Vita Sancti Cadoci*", in FORD 1983, 1-15.
- BRUNAU, Jean-Louis 1986: *Les Gaulois - Sanctuaries et rites*, Editions Errance.

- CAMPBELL, Joseph 1981: "Indian Reflections in the Castle of the Grail", in O'DRISCOLL 1981, 3-30.
- DANAHER, Kevin 1981: "Irish Folk Tradition and the Celtic Calendar", in O'DRISCOLL 1981, 217-42.
- DOAN, James E. 1983: "A Structural Approach to Celtic Saint's Lives", in FORD 1983, 16-28.
- DOOLEY, Anne 1981: "The Heroic World: The Reading of Early Irish Sagas", in O'DRISCOLL 1981, 155-59.
- FORD, Patrick K. 1983b: "Aspects of the Patrician Legend", in FORD 1983 29-49.
- Id. 1983c: "On the Significance of some Arthurian Names in Welsh", *BBCS* 30, 268-73.
- GRISWARD, Joel H. 1986: "Histories médiévales", *Magazine littéraire* 229, 33-35.
- GUYONVARCH, Christian-J. et F. LE ROUX 1986: *Les Druides*, Ouest-France.
- HENKEN, Elissa R. 1983: "The Saint as Folk Hero: Biographical Patterning in Welsh Hagiography", in FORD 1983, 58-74.
- JARMAN, A.O.H. 1981: "The Heroic View of Life in Early Welsh Verse", in O'DRISCOLL 1981, 161-68.
- KRAPPE, A.H. 1930: *Mythologie universelle*, Payot (repr. Arno Press 1978), ch. XI "La Mythologie celtique", 220-38.
- Id. 1933: "Arthur and Gorlagon", *Speculum* 8, 223-35.
- Id. 1943: "Avallon", *Speculum* 18, 303-22.
- KRUTA, Venoeslaus 1976: *Les Celtes*, P.U.F. (Que sais-je? 1649).
- LE GOFF, Jacques et E. LE ROY LAUDURIE 1971: "Mélusine maternelle et défricheuse", *AESC* 26, 587-622.
- LE GOFF, Jacques et P. VIDAL-NAQUET 1979: "Lévi-Strauss en Brocéliande" in Raymond BELLOUR et C. CLEMENT éd, *Claude Lévi-Strauss*, Gallimard, 265-319.
- LE ROUX, Françoise et Ch.-J. GUYONVARCH 1983: *Morrigan-Bodb-Macha La Souverainete guerriere de l'Irlande*, Ogam.
- LEVI-STRAUSS, Claude 1983: *Le regard éloignée*, Plon, ch. 16-18, "De Chrétien de Troyes à Richard Wagner"; "Note sur la Tétralogie" (佐々木陽太郎訳「クレチャン・ド・トロワからワグナーへ」『現代思想』13-4(1985), 42-63).
- LOOMIS, C. Grant 1933: "King Arthur and the Saints", *Speculum* 8, 478-82.
- LOOMIS, R.S. 1933: "The Irish Origin of the Graile Legend", *Speculum* 8, 415-31.
- LYSAGHT, Patricia 1974-76: "Irish Banshee Tradition: A preliminary survey", *Béaloides: Iris an chumann le Béaloides Éireann: The Journal of the Folklore of Ireland Society* 42-44, 94-119.
- MACCANA, Proinsias 1981: "Mythology in Early Irish Literature", in O'DRISCOLL 1981, 143-54.
- MACNEILL, Máire 1982: *The Festival of Lughnasa: A study of the Survival of the Celtic Festival of the Beginning of Harvest*, University College, Dublin.
- MARKALE, Jean 1969: *Les Celtes et la civilisation celtique: mythe et histoire*, Payot.
- Id. 1972: *La femme celte: mythe et sociologie*, Payot.
- Id. 1976: *Le roi Arthur et la société celtique*, Payot.
- Id. 1983a: *Mélusine ou l'androgynie*,

- Editions Retz.
- Id. 1983b: *Le Christianisme celtique et ses survivances populaires*, Imago.
- Id. 1986: *Petit dictionnaire de mythologie celtique*, Editions Entente.
- 盛 節子 1981: 「アイルランドにおける初期キリスト教のadaptationに関する考察」『エール』7, 3-22.
- Id. 1982: 「アイルランド初期キリスト教の伝統的理念とpaschal controversy」『上智史学』27, 20-40.
- Id. 1983a: 「初期アイルランド・キリスト教の靈性——ヴァニアン及びコロンバヌスの『贖罪規定書』を通して」『キリスト教史学』37, 32-52.
- Id. 1983b: 「アイルランド教会における靈性刷新運動（8-9世紀）——Celi Deの理念とその性格——」『エール』8, 6-23.
- Id. 1985a: 「アイルランドのキリスト教受容における修道院学校の役割」『キリスト教史学』39, 1-22.
- Id. 1985b: 「聖コロンバヌスにおける愛と生——Instructionesを通して」『文京女子短期大学保育科紀要』4, 153-70.
- Id. 1986: 「ヨーロッパにおけるキリスト教の土着——初期アイルランド・キリスト教」『ICPAニューズレター』9, 17-27.
- Id. 1987a: 「初期アイルランド教会と教皇制——その歴史的な位置づけ」『エール』9, 41-61.
- Id. 1987b: 「聖コロンバヌス(543-615)のExileとその理念——「緑の殉教」観——」『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）6, 121-51.
- 中木康夫 1984: 『騎士と妖精』, 音楽之友社
- Ó CATHASAIGH, Tomás 1977: *The Heroic Biography of Cormac Mac Airt*, Dublin Institute for Advanced Studies.
- Ó HÉALA Í, Pádraig 1974-76: "Moral Values in Irish Religious Tales" *Béaloides* 42-44, 176-212.
- PUHVEL, Jaan 1987: *Comparative Mythology*, Johns Hopkins University Press, 166-188, ch. X "Celtic Myth".
- RADNER, Joan Newlon 1983: "The Significance of the Threefold Death in Celtic Tradition", in FORD 1983a, 180-99.
- RAY, Benjamin C. 1987: "Stonehenge: A New Theory", *HR* 26, 225-78.
- ROSS, Anne 1981: "Material Culture, Myth and Folk Memory" in O'DRISCOLL, 197-216.
- Id. 1986: *The Pagan Celts*, B.T. Batsford (revised version of *Everyday Life of the Pagan Celts*, 1970).
- SERGEANT, Bernard 1986: *L'Homo sexualité initiatique dans l'Europe ancienne*, Payot, ch. X "Antiquités celtiques", 177-91.
- STERCKX, Claude 1986: *Elements de cosmogonie celtique*, Editions de l'Université de Bruxelles.
- TATLOCK, J.S.P. 1933: "The Dragons of Wessex and Wales", *Speculum* 8, 223-35.
- WEBSTER, Graham 1986: *The British Celts and their Gods under Rome*, B.T. Batsford.
- WEISWEILER, Josef 1950: "Die Kultur der irischen Heldensage", *Paideuma* 4, 149-70 (reprint. ed. A.E. Jensen, *Myth, Mensch und Umwelt*, Arno Press, 1978).

#### 内容紹介

- ACTES 1984: 各項を見よ。
- ARABAGIAN 1984: インドとケルトの叙事詩の比較を中心とし、大女神/王権の象徴という、前インド・ヨーロッパ的存在がインド・ヨーロッパ語族支配下でどのように変容していったかを論ずる。ブルース・リンカーンの影響大。マリヤ・ギンブタス的な単純なフェミニストの視点が強すぎ、厳密さに欠ける面があるのは残念。

- BADER 1980: デュメジルの三機能説に沿ってギリシアとアイルランドの叙事詩中の戦士の神話性、社会性を分析。対象はネストル・アキレウス(ギリシア)、クー・フリン(アイルランド)。他にローマ、ヒッタイト、インドの比較例も有。
- BAMFORD 1981: ケルト・キリスト教史中の主要な聖人たち(ブリッド、パトリック、コロンバ)を中心に概説。
- BHREATHNACH 1982: アイルランド王権神話で王権を象徴する女神は大きな役割を演ずる。醜い彼女は正当な王によって美しく変身する。しかし彼女はつねに死の影も帯びており、筆者は主権女神のこの側面を北欧神話との比較も交えて論ずる。
- BINCHY 1958: アイルランド全土の王権の地タラでの祭儀を文献面から詳細に論ずる。
- BITEL 1986: アイルランドには7c以前に多くの女子修道院があったことが聖人伝や地名から窺える。その衰退の原因の問題も含め、この問題に取り組んだ数少ない論文の一つ。
- BORST 1983: ウェールズ聖人伝の中でも、その古さから最重要視される『聖カドク伝』の分析。『マビノギ』と共通する話素が多いことは注目される。
- BRIARD 1987: 大陸ケルトも含めた考古学的出土品を中心とし、ケルト宗教の中から前インド・ヨーロッパ的、土着的な青銅期(前2500-800)の神話・シンボルを抽出、分類。
- BRUNAUX 1986: 大陸ケルトの中でも主としてフランスのガリア人の出土品に基づいて、その宗教を再建しようとするもの。
- CAERWYN WILLIAMS 1971: アイルランドの詩人(fili)は未知の世界の知識を知りうる一種のシャーマンで、ドルイド僧に近い。アイルランドを含めケルト世界が文字を拒むのは、言葉の超自然的力(=詩)を重視したためである。ゆえにアイルランドでは王と詩人の関係が重要な問題となる。
- CAMPANILE 1976/77: アヴェスタ中の『第10ヤシュト(ミスラ)』の144詩節を10世紀アイルランドのキリスト教的叙情詩と比較し、類似を指摘。
- Id. 1979: アイルランド法テキストでしばしば他所者を表すcú glas「蒼い犬」を、北欧のvargrと同一視するのに反対し、海を越えて来る英国人のこととする。しかしそのルーツは、狼に関する宗教的シンボリズムに根差したインド・ヨーロッパ語族期からの古いものである。
- CAMPBELL 1981: 有名な神話学の啓蒙家による広い視野からの比較によるアーサー王伝説論。エリオット「荒地」まで続く西洋文化中のアーサー王伝説の位置づけ。
- CAERY 1982: アイルランド伝統の信仰に特徴的な異界(síd)の分析。
- Id. 1983a: 北欧神話ではオーディンが片目をミーミルの泉に捧げるが、同様の話型がアイルランドの『ブリギット伝』に見られる。これは「知恵の泉」が目の供犠によって生じるというインド・ヨーロッパ神話素に由来すると筆者は考えている。
- Id. 1983b: アイルランドの戦争女神の分析。cf. Donahue 1941; Le Roux & Guyonvarc'h 1983.
- Id. 1984: 大陸ケルト語名 Nodon, アイルランド語名 Nuadu, ウェールズ語名 Nudd と呼ばれる大神の性格と位置づけ。
- CLEMEN 1927: ケルト宗教に関する短い概説。図版有。参考文献はごくわずか。
- COHEN 1977: アイルランド聖人伝中の「森の狂人」の姿は、デュメジルのいうインド・ヨーロッパ的「戦士の三つの罪」の話型を反映しているとする。
- COOMARASWAMY 1945: 醜い女性が男性の力によって本来の美しい姿を表わすというモチーフは世界の民間伝承に多いが、ケルト圏ではそれが神話の一部として大きな地位を占めている。こうしたモチーフの他地域との比較。多少自然神話学的解釈。
- CORMIER 1976/77: 中世フランスの『トリストランとイゾルデ』伝説とその源となっ

- たと思われる『デイドレとノインウの物語』の関係を考察。
- CROSS 1952: アイルランド伝承のモチーフが他地域のモチーフとどれだけ類似し、また独自性を有しているかという比較研究に不可欠なチェックのための必携書。
- DANAHER 1981: アイルランド各地の祭、風習について。過去と現在の連続性も指摘されている。写真多。
- DE VRIES 1957a: 北欧スカルド詩とケルト詩の関係を Kenning, meter から考察。北欧側がケルトの影響を受けたとする。
- Id. 1957b: 父と子が知らずに戦い、父が子を殺すという英雄悲劇ではイラン『王書』のロスタムとソフラブ父子が有名だが、アイルランドのクー・フリンとコンラ父子の場合も形態は完全に一致するし、類例はドイツ、ロシアにもある。ギリシアは逆でライオスとオイディプス、オデュセウスとテレゴノスのように子が父を殺す父殺し。
- Id. 1957: 北ヨーロッパ諸部族についての古典古代人の知識は混乱していたし、ケルト人とゲルマン人が全く別々に生活していた訳でもない。ゲルマン系とされるキンブリ一族、チュートン族も紀元前の記録を見る限りではケルト要素が強く、ゲルマン、ケルトの混成ではなかったかとか、むしろケルト人ではなかったかと考えられる。
- Id. 1958: ケルト宗教の呪術性を強調した van Hamel 1934 への反論、批判。
- Id. 1960: ドゥルイド僧について資料集成。他のケルト学者の見解とさほどの違いは見られない。cf. Guyonvarc'h & Le Roux 1986; Markale 1985 ; Piggot 1968.
- Id. 1963: *Keltische Religion*, W.Kohlhammer, 1961の仏訳。詳しくは Rees & Rees, Guyonvarc'h & Le Roux 1986 に劣るが、包括的である点では劣らない。必読書。
- DILLON 1947a: 文献学以外のディロンの主たる貢献は、古代インドとアイルランドの宗教的慣習の比較である。その中でも本篇ではじめて論じられた「真実」の力に対する宗教観の問題は、後に Wagner 1970; Watkins 1979 で更に発展させられた重要なものである。
- Id. 1947b: 以下のディロンの諸論文の前提となる言語学的比較覚書。
- Id. 1951: アイルランドの王即位儀礼に関するさまざまな言及を集成。Dillon 1973 の出発点。
- Id. 1963: Dillon 1951の補強として、王即位儀礼に限らずケルトとインドの宗教類似を多方面にわたって指摘。資料豊富。
- Id. 1973: アイルランドの王即位儀礼が細部に至るまでインドの王即位儀礼と対応しており、共通起源を持つとする。
- DI NOLA 1970: 項目別概説。よくまとまっている。図版有。参考文献充実。
- DOAN 1983: プロップにならってウェールズとブルターニュの聖人伝の構造的分析を行なったもの。その神話的背景が明らかにされる。
- DONAHUE 1941: アイルランドの戦争女神とゲルマン神話でのオーディンの使女の女戦士ヴァルキューレの比較。cf. Caery 1983b; Le Roux & Guyonvarc'h 1983.
- DOOLEY 1981: アイルランドの象徴ともされ、シングの『悲しみのデアドラ』でも名高いDeirdriu (Deidre) をめぐる英雄伝説について。分析はバルト風。
- DRAAK 1959: アイルランドの王権についてこれまで知られていること(比較はなしだが)を要領よくまとめている。
- Id. 1962: アイルランドには明確な神存在がなく、逆に超自然的存在(妖精など)が多いとし、それは海を越えて移住した結果、宗教体系が崩れたのだとする。勿論これは、ケルト宗教研究が無駄というのではなく、資料の限界をわきまえ、慎重に再建すべしということに他ならない。
- Id. 1969: 短か目だが項目別に分けられ、手ぎわよくまとめられた概説。
- DRÖGE 1982: ケルトにおける輪廻転生観

- をヒンドゥー教の *saṃsāra* と比較し、両者の性格は異なるとする。
- DUBUISSON 1973: 『約束の地でのコルマックの冒険』というアイルランド伝承で、王コルマックは異界の王から①杯②槍③銀枝を受け取る。それらの品々は他のアイルランド伝承においても、デュメジルの三機能の品々を象徴する役割を演じている。
- Id. 1975: 中世の三圃制、三身分の起源をアイルランドの三階層区分に求める。アイルランドから英国、フランスへの伝播を考える。
- Id. 1978a: 聖コロンバヌスとエード王の対話は救われた三人の王について。救われ方は三機能に分類されるが、第三機能の王は施しをするのではなく、逆に強欲とされている。この不可解な描写はヘロドトス『歴史』でソロンが語る物語にも認められる。これは三機能の調和を強調するよりも、むしろ上位二機能と第三機能の対立、違いを強調する形となっている。
- Id. 1978b: Dillon 1951, 1973 のアイルランドとインドの王即位儀礼の比較を更に完全にしたもの。決定的。
- DUMÉZIL 1940: なぜケルト人が文字使用に抵抗したかをインド・ヨーロッパ語族とセム語族の言葉と文字に対する態度の対照さから説明し、口承性を重視するインド・ヨーロッパの伝統に最も忠実であったのはインドとケルトであったとする。
- Id. 1954: 三人のマハと呼ばれる女神の存在の各々が三機能を代表しているとする。
- Id. 1963: アイルランドの小王ネフタンは、インド神話のアパム・ナパート（水の子）やローマ神話のネプトゥーヌスと語源的に一致し、いずれの伝承も王権の象徴たる「燃える水」についてのものだとする。  
cf. 松村 1985a.
- Id. 1971: 「王の罪」および王がその子孫によって救われるというインド・ヨーロッパ神話素の一環としてアイルランドのエハド・フェードリフの場合を取り上げる。
- Id. 1981: 各項を見よ。
- Id. 1985: ウェールズ伝承『マビノギ』の一つ「マスニイの子マス」でマスはインド・ヨーロッパ型の王として三機能全てを体現するが、彼の子と孫たちはインドの『マハーバーラタ』のパーンドゥの子らのように各機能を分担して代表するという。しかしインドの例ほどすっきりとはしておらず、かなり形が崩れている。
- DUVAL 1976: 大陸ケルト宗教を出土品中心にまとめたもの。図多。
- FORD 1974: Dumézil 1963 のケルト伝承部分の増補。
- Id. 1983a: 各項を見よ。
- Id. 1983b: アイルランドの守護聖人、聖パトリックの伝記に見られる異教とキリスト教の緊張関係や、パトリックの生涯の英雄パターンを指摘。
- Id. 1983c: アーサー王の所持品、動物の名称には「白」を意味する語が多く含まれている。白はケルト世界では「神聖な」、「異界」の色であり、これによって物語の神話的背景が明らかになる。
- GRAY 1981, 82, 83: アイルランドの神話的建国伝承『モイ・トゥーラの第二の戦い』の構造とその中の神話要素を徹底的に分析したもの。この伝承解釈の決定版であろう。  
cf. Le Roux 1968b.
- GRISWARD 1969: アーサー王の死に際し、剣が湖に投げ込まれる。同じモチーフはコーカサスのナルト人の伝承の英雄バトラズの最期についても語られている。両者の類似は構造的で歴史的関連は疑いえない。問題はどのようにしてそれが生じたかである。この点はグリスワールでも未解決。  
cf. リトルトン 1977.
- Id. 1984: 13世紀初頭の物語『聖杯探求』はかなりキリスト教的だが、その中にはインド・ヨーロッパ的三区分も残っている。特に色彩の三区分に注目し、根底には罪の三区分も見られるとする。
- Id. 1986: 中世フランスの伝説、民話中に見られる三機能区分例の紹介、概説。

- GUYONVARCH 1984: 「異界の女」, 「ダグダの大釜と聖遺物」, 「ドゥルイドと王」, 「主権(女あるいは不貞な女王)」の四つの神話的テーマについて研究の進展を概観。
- Id. et Le Roux 1986: 題名はドゥルイドのみであっても, 内容は広く古代アイルランド多神教を論じる。引用に原文がないのは惜しまれるが, その豊富さ, 言語学的正確さは第一級であり, ケルト宗教研究において現段階では最も信頼すべき一冊。索引がないのは残念。
- HENKEN 1983: ウェールズの聖人伝での聖人の英雄としての生涯パターンの抽出。cf. Ford 1983b; Rees, A. 1936.
- HENRY 1982: アイルランド語では「戦う」と「沸騰する」, 「勇氣」と「蒸気」が結びつけられている。こうした感覚から『クーリーの牛奪取』に見られるクー・フリンの「戦士の月」など戦士特有の憤怒の相が説明される。
- HILTEBEITEL 1982: 『クーリーの牛奪取』と『マハーバーラタ』での英雄一騎討ちの場面描写の一致を指摘。英雄叙事詩モチーフのインド・ヨーロッパ起源のみならず, 宗教的背景も浮かび上る。秀作。
- HULD 1981: 『クー・フリンの誕生』では彼の母と王との関係について, 妹と娘の二つの型がある。これは女の兄弟の娘が女の姉妹に等しいことから生じる混同であり, オマハ型親族体系を想定させる。
- HULL 1932: 最も長命な動物に関する世界各地の伝承を紹介した後, アイルランドの「アキルのタカ」という物語に移る。ここでは輪廻転生の思想が明らかである。cf. Dröge 1982. 果たしてカラスの姿をとる戦争女神 Bodb と関係するのかが興味深い。cf. Le Roux et Guyonvarc'h 1983 etc.
- JARMAN 1981: ウェールズ英雄詩 *Gododdin* を中心に, 英雄世界の姿を分析, それがアイルランドのクー・フリン型とは異なった, より人間らしい在り方を強調しているとする。
- KILLEEN 1971: 「片足しかサンダルを履いていない男」伝承。cf. MacCana 197-3.
- KRAPPE 1930: デュメジル以前の比較神話学によるケルト神話の短めだが充実した概説。この時代としてはよく出来ていて, 教えられる点が多い。Puhvel 1987 と比較すると興味深い。Krappe という不当に無視されてきた研究者の偉大さも分かる。
- Id. 1931: 「荷車のランスロット」とグウィニヴェアのエピソードを樹木女神の問題として捉え, ギリシャのヘレン, アルテミス, ヘラヤインドのシータと比較し, 春の植物儀礼とも結びつける。
- Id. 1933: アーサー王がカラスに変身したというケルト伝承の由来について。カラスの生態, カラスの名がケルト語で *bran* であり, 神 *Bran* と類似すること, 『ブランの航海』でブランが至福者の島 (cf. *Avallon*) に行くこと, 聖杯伝説の *Fisher King* の名 *Bron* とも似ることなどから, カラスへの変身伝承が生じたのではないかとする。
- Id. 1943: アーサー王が死後に赴く *Avallion* 「リンゴ」に関しリンゴの他界としての象徴性を比較神話学から論じる。資料引用は博識だが, 言語学的解釈には疑問が残る。
- Id. 1945: 中世ウェールズのラテン語散文物語『アーサーとゴルラゴン』はアーサーを主人公とし, 一見ケルト的だが, 筆者はこれをペルシア, オセット, スーダン, ロシア, ユーゴスラヴィアの類似の物語と比較し, 中世に十字軍の流れによってオリエントの物語がウェールズまで持ち込まれ, アーサーを主人公として書き改められたとする。
- KRUTA 1976: 考古学の立場から, 大陸ケルトの宗教遺物, 出土品を紹介。入門書として手頃。
- LANTIER 1960: 概説。図版はよい。内容も項目別に一応すべての面に言及しているが, 深みに欠ける。参考文献なし。
- LAYARD 1975: ウェールズ伝承『マビノギ』の一つ「キルヒとオルウェン」をユン

- グ心理学の手法で分析したもの。
- LE GOFF et LE ROY LAUDURIE  
1971: メリジュース伝承のケルト起源は  
確実だが、問題はこの異類女房譚がなぜ中  
世に人気があったかである。
- LE GOFF et VIDAL-NAQUET 197-  
9: 12世紀のクレティアン・ドゥ・トロワ  
のロマン『イヴァンまたはライオンの騎  
士』のレヴィ＝ストロース的分析およびそ  
の中でのデュメジルのいう戦士の二タイプ  
の区分の存在の指摘。
- LE ROUX 1955a: 後1世紀のルカヌス  
『パルサリア』とそのスコリア（最も問題  
の多い文献とされる）に記されている三神  
とその各々への人身御供の独特のやり方  
（大釜で煮る、木につるす、焼く）を他の  
ケルト伝承と比較したもの。結論は出せず  
じまい。しかしこれがインド・ヨーロッパ  
三分区イデオロギーで説明できる可能性は  
高いと思われる。
- Id. 1955b: ケルト宗教ではエポナに代表さ  
れる馬形または馬に乗った女神が大きな地  
位を占めている。神的牝馬と動物形女神の  
問題を論ずる。
- Id. 1957: 19世紀末にフランスで発見された  
ガリア人のコリニー・カレンダーは、昼/  
夜、夏/冬の対立を基本としたケルト世界  
観を示している。その中には SAMONと記さ  
れた日があり、これはアイルランド四大季  
節祭の一つ Samain であろうとされる。
- Id. 1958a: ユピテルと同一視されたケルト  
神タラニスについての碑文、古典古代の言  
及をすべて掲げ、言語的考察も行い、この  
神が「雷神」で、北欧のトールに対応する  
とする。
- Id. 1958b: アイルランドと大陸ケルトの首  
狩りの風習とその王宮での保管室存在の宗  
教的意義について。殺した英雄の脳を取り  
出し、ライムと混ぜて堅い玉として王殺し  
の武器にするという伝承もある。
- Id. 1958c: アイルランドの神話・伝説世界  
で世界秩序崩壊の原因として、槍、女、犬  
が挙げられる。いずれも両義的性格が強い。
- これら三者が三機能区分に沿うものか現段  
階では不明。
- Id. 1960a: デューラーの絵にも残るケルト  
神オグミオスは「縛る神」である。ル・ル  
ーはデュメジルに倣いつつも独自性を加  
え、オグミオスをオーディンやヴァルナの  
ような魔術的主権神とする。cf. Loicq  
1984.
- Id. 1960b: Dagda, Mog Ruith, Ogmá,  
Cathbad らの伝承から神話的ドゥルイド  
像を分析し、彼らには純粋に聖職者の側面  
に加え、デュメジルのいう第一機能の二極  
化（Mitra-Varuṇa が例）に合致すると  
する。cf. Guyonvarc'h et Le Roux  
1986.
- Id. 1960c: 宗教史研究の歴史の中でケルト  
宗教がどのように解釈されてきたかを自説  
を交えつつ紹介したもの。
- Id. 1962: アイルランドの四大季節祭につ  
いて。Guyonvarc'h et Le Roux 1986  
にそのまま所収。
- Id. 1963: 王即位問題を原典紹介、他研究者  
の批判によって詳しく論じたもの。問題の  
視点がかなり広く、参照すべき。
- Id. 1965a: ケルトの男性戦神の存在につ  
いて。cf. Id. 1960b（ドゥルイドの戦士の側  
面）。
- Id. 1965b: 『クー・フリンの誕生』につ  
いて他の研究の紹介、ウェールズの対応例の  
指摘など。研究ノートのだが問題の所在を  
知るには有益。但し、Melia 1975 も見  
よ。
- Id. 1967: ケルト宗教の一般的問題を彼女な  
りにかなり細かく解釈している。Guyon-  
varc'h et Le Roux 1986, Le Roux  
1970 の基本になったもの。
- Id. 1968a: ケルト神託についての記述を集  
めたもの。問題自体、まとまった結論は出  
しにくいもの。
- Id. 1968b: 『アイルランド征服の書』（*Le-  
bor Gabala Erenn*）という、日本の『古  
事記』に相当する、アイルランドでの数少  
ない神話らしい伝承の訳と圧倒的に詳細な



- 注釈。これと並ぶ『モイ・トゥーラの第二の戦い』については、Gray 1981,82,83。
- Id. 1970: Le Roux 1967を平易にしたもの。個人的には最も優れた概説と思う。アイルランド、大陸ケルト、ウェールズのすべての問題についてある程度の深さまで言及しているし、項目別になっていて読み易い。ただし図版はなく、参考文献は不足。
- LE ROUX et GUYONVARCH 1968: Le Roux 1970 を更に簡略にしたもの。図版があり、鮮明だが、読むならLe Roux 1970の方が良い。
- Id. et Id. 1981: デュメジル理論によってケルト神話研究にもたらされた成果の短い報告。cf. Rees, B. 1981.
- Id. et Id. 1983: Mórrígan, Bodb, Macha などのアイルランドの戦争女神はカラスの姿で多く現れ、特にクー・フリン伝説との関わりで重要だが、彼女たちの諸側面、相互関係を論じたもの。cf. Caery 1983b; Donahue 1941.
- LÉVI-STRAUSS 1983: クレティアン・ドゥ・トロワによる聖杯伝説からワグナーの楽劇『パルシファル』までに至る変容の構造論的分析。
- リトルトン 1977: Grisward 1969 を受け、アーサー王伝説がバトラス伝承と類似しているのは、ローマ軍によって英国に連れてこられたサルマティア人(イラン系)の伝承を中核とするからではないかとする。大胆で興味深い仮説だが、学界の賛同はまだ十分には得ていない。
- LITTLETON 1979: オセット人のナルト伝承に見られるナルティアモンガ(「勇士の啓示者」という酒杯はアーサー王伝説の聖杯と対応する。とはいえ、アーサー王伝説のすべてがサルマティア・アラン起源とはいえ、ガウェイン、ランスロット、グイネヴィアらはケルト固有とする。
- Id. 1982: ヘロドトスの伝えるスキュタイ人の剣崇拜をはじめ、剣と王権の関連を強調する神話は北欧、ギリシア、ケルト(Exc-
- alibur! )などに認められる。より広い比較論として、大林太良・吉田教彦『剣の神・剣の英雄』(法政大学出版, 1981)も参照。
- LITTLETON et THOMAS 1978: リトルトン 1977 のより詳しいもの。
- LOICQ 1984: Le Roux 1960a の示唆を受け、オグミオスとヴァルナの比較をより厳密に行ったもの。またオグミオスの名をオガム文字と結びつけ、共に「(魔術的に) 捕える」という語根\*gem-に帰する。
- LOOMIS, C.G. 1933: ウェールズ、ブルターニュ、英国の聖人伝にはアーサー王に言及するものが少なからずある。それらを選び出してみると、聖人伝の歴史性の程度についての評価の指標が与えられる。
- LOOMIS, R.S. 1927: アーサー王伝説をケルト神話の変化したものとし、歴史的段階別に変化を後跡けた専門書。古くなっている部分もあるが、必読。
- Id. 1933: 聖杯伝説の起源はウェールズかアイルランドかは決し難いが、ケルト宗教の中にあるとする。
- Id. 1945: アーサー王伝説の妖精モルガンはウェールズの女神に由来すると説く。
- LOVECY 1977/78: 王権象徴の女神との結婚のテーマは、純粋神話の残っていないウェールズでは物語化されている。ここで取り上げられている『マビノギ』の一つ「ペレディル」もその一例。
- LYLE 1980: デュメジルの男神中心の三機能説に(女性研究者らしく?)女神を加えて四極化し、方位、四季、四色との対応を作り上げる。
- LYSAGHT 1974-76: 死に際して現れる超自然的な女性像 banshee(妖精の丘 síd の女)の信仰は今日のアイルランドにも広く残っている。その分布、起源を論じたもの。
- MACCANA 1968: 17世紀までのアイルランドとスコットランドでは、花嫁衣装をかつてのドゥルイドの後裔の詩人(fili(d))に与える風習が記録されているが、古代インドでも花嫁の衣装はバラモンに与えられた。

これをインド・ヨーロッパの宗教儀礼の残存と見る。

Id. 1970: 図版豊富, 索引あり。アイルランド神話の入門書としては最良のもの。

Id. 1972: アイルランドとウェールズの文学作品から法律, 宗教的言及を集めて, 古代インドの例と比較し, ケルトの二地域の類似点, 相違点を外的要素の影響と内的刷新の両視点から指摘。

Id. 1973: 王即位儀礼におけるサンダルと片足しかサンダルを覆っていない英雄の伝承の関連について。cf. Dillon 1973, Dubuisson 1978b; Killeen 1971.ギリシアの例(テーセウス)については, W.Deonna, REG 28(1915); A.Brelich, NC 7-9(1955-57)。

Id. 1979: 異教下の王権の在り方をキリスト教が破壊せず, いかにしてアイルランド王国制の枠組内に自ら入り込んでいったかを考察。その作戦の成功は, すでに古アイルランド法において司教に王と並ぶ地位が与えられていることにも示されている。こうした異教とキリスト教の融合の媒介, 象徴であったのが詩人(fili(d))である。

Id. 1981: デアドラとマハというアイルランド叙事詩中の二人の女性像の背後にエポナやウェールズのリアノンといった大女神の姿を認める。

MACCULLOCH 1918: 概説書。古くなっているが資料集としては比較的正確だし有用。ただし出典は明記されていない。解釈はダメ。

MACNEILL 1982: アイルランド四大季節祭の一つで夏に行われるルーナサ(Lughnasa)について過去から現在までのあらゆる伝承, 風習を多くの写真と共にまとめた大著。本書にしか見られない現代の民話も多い。専門家必読。

MANDEL 1982: ケルト神話において北欧神話のロキに対応するようなトリックスターの存在としてBricriuを挙げるが, 格別に目新しい論ではない。cf. Raude 1957.

MARKALE 1969: 歴史的流れも含めケル

ト圏の神話, 宗教をケルト文化の一環として位置づけようとしたもので, 彼の作品の中ではおそらく最上のもの。ただしマルカルはアイルランド語は出来ず, 学者とはいえない。紹介者としては優れているが, 彼のみを典拠とすることは不可。

Id. 1971a: アイルランドの神話, 伝説をきわめて要領よくまとめて紹介してある。索引なし。

Id. 1971b: Id. 1971a と同様の形でウェールズ, ブルターニュの伝承を紹介する。『マビノギ』以外のものも豊富に紹介されているので便利。索引なし。

Id. 1972: 女神, 伝承上の女性についての集大成。ただし余分な脱線もある。索引なし。

Id. 1975: ブルターニュのケルト伝承の詳しい紹介と解釈。類書は少なく, 貴重。索引なし。

Id. 1976: アーサー王伝承とそのケルト的背景についてのまとめた論考。索引なし。

Id. 1983a: メリュジューヌ伝承をまとめたもの。便利だが, 入門書とも専門書とも位置づけにくい。索引なし。

Id. 1983b: ケルト圏のキリスト教史の概要とケルト異教との関わりについて。分かり易いが詳しさにかける。索引なし。本格的論考としては盛の一連の論文を見られたい。

Id. 1985: ドゥルイド教についての概説書。悪くはないが, Guyonvarc'h et Le Roux 1986 には遠く及ばない。索引なし。

Id. 1986: 辞書型式でアイルランド伝承の登場人物, 物語を述べるが, 短かすぎて, まったくの初心者以外には役に立たない。マルカルは乱作のためか新しいものほど質が低下している。

松村 1985a: ウェールズの民話『グウィオン・バハ物語』, 『タリエシン物語』がインド・ヨーロッパ語族の王権神話の構造を保持していると指摘。

Id. 1986b: クー・フリンの幼年期伝承の中心にインド・ヨーロッパ語族戦士集団のイニシエーション儀礼・伝承を考察。cf. Melia 1975.

MCKENNA 1980: 『マビノギ』の「ダヴィッドの王ブウィル」における女性の姿の王権について。

MEID 1971: 宗教詩人の実態について。

Id. 1974: 宗教詩人—権力—法—(魔術的)医療の関連を古代アイルランドの社会構造として捉え直している。

MELIA 1975: 『クー・フリンの誕生』の異本比較と構造分析によって、英雄クー・フリンの伝承が父ルグ神の伝承と構造的に一致することを指摘し、これが意図的模倣であるとする。つまり叙事詩は神話に倣うとも、神話が叙事詩に変容するともいえる。

Id. 1979: 「戦士の宗教」の聖典は英雄叙事詩である。『マハーバーラタ』、『イリアス』、『クーリーの牛奪取』を比較しつつ、その聖典としての様式を論ずる。

Id. 1983: 9世紀の *Cain Adomnáin* 「アダムナンの法」は法律のみならずさまざまなジャンルを含む。従来、アダムナンの死と再生はキリストのそれに倣ったと考えられてきたが、ここではむしろ前キリスト教的・ドゥルイド教的シャーマニズムにおけるイニシエーションの反映ではないかとされている。

MICHAEL 1967: クレティアン・ドゥ・トロワはアーサー王伝説の宝庫だが、中世キリスト教社会のモラルが加えられ、変化していることも確かである。どのような変更が加えられているかは、『アレキサンダー王物語』との共通点から逆照射される。

盛 1981: 5世紀以来のキリスト教のアイルランドへの適応、土着化、すなわち adaptation の過程の論述。

Id. 1982: 7世紀にケルト教会と大陸およびイングランド教会の間に起こった「復活祭論争」を取り上げ、両者の違い、論争の結果、それを通して見られるアイルランド教会の独自性を考察。

Id. 1983a: 初期アイルランド教会の伝統的霊性を、指針として作成されたヴィニアンとコロンバヌスの『贖罪規定書』を通して考察。

Id. 1983b: 7～8世紀にアイルランド教会は発展と共に世俗化した。それに対する批判として禁欲主義を特徴とする霊性刷新運動が起こり、後のアイルランドの精神的伝統の一部となった。この運動の歴史の論述。

Id. 1985a: アイルランドのキリスト教化において修道院学校の果たした役割は大きかった。アイルランド古世俗法(ブレホン法)からその制度面を、また学校で使用された写本テキストからキリスト教教育の理念と役割を見る。

Id. 1985b: 聖コロンバヌスの著書 *Instructiones* における彼のキリスト教観の独自性について。

Id. 1986: アイルランドの場合に見るキリスト教土着化のケース・スタディ。

Id. 1987a: 6世紀以降独自の修道院制を保持していたアイルランド教会も12世紀にはローマ司教制に組み込まれる。アイルランド教会の教皇制の中での位置づけ。

Id. 1987b: アイルランド・キリスト教の中心にある巡礼と殉教を集約する Exile と「緑の殉教」を取り上げ、修道者の生き方を聖コロンバヌスの場合を中心に論述。

NAGY 1980: フィンが指を火傷し、知恵を得るとする伝承は、北欧の英雄シグルズ(=ジークフリート)の場合と対応している。レヴィ=ストロース的な料理コードも混えた分析によれば、対応はこれに留まらない。また両者には歴史的影響関係があったと考えられる(ただしヴェクトルの方向は不明。ゲルマンとケルトの影響関係は必ずしも一方向ではないので、やっかい)。

cf. Scott 1930.

Id. 1981a: フィンの幼名は Demme Mael. Mael とは「坊主頭」で奴隷状態、人間以下の様子を指す。しかしまたそれはドゥルイド僧の名にも現れる。それは通常の社会の外に位置し、超自然的力を行使する者の徴しなのである。

Id. 1981b: フィン、オシーンらが畏にかかって異界に行き、殺されかかるが、そこから新しい知識を持って帰還するというタ

- イブの物語 (bruidhean 型) を、シャーマンの異界への旅として解釈しようとする。
- Id. 1981/82: 宗教詩人の詩作および預言の方法について。またなぜそうした方法で未知の事象を知りうると考えられたかを liminality の観点から説明する。
- Id. 1982: 「聖なる狂気」=詩作=知恵=シャーマニズムの問題を12世紀のテキスト *Buile Shuibhne* を中心に論ずる。
- Id. 1983: アイルランドの英雄伝承には最終的な形態がキリスト教時代に完成し、聖パトリックら聖人が登場するものが少なくない。問題はキリスト教の影響をどの程度のものと査定するかである。ナージュはドルイド教の衰退によって空白となった部分に聖人の姿が修道士によって代わりに補填されたとする。
- Id. 1984: アイルランドの代表的英雄クー・フリンとフィン・マックールの『幼年期の武勲』(macgnímrada) を比較すると、両者は極めて類似する。それは両者が共に戦士神話あるいは戦士へのイニシエーション儀礼の反映だからである。cf. Ó Cathasaigh 1977.
- Id. 1985: アイルランド南部を中心とするフィンとオシーンの伝承をファン・ジュネップ、ターナーらの理論も用いて、文献学、人類学、宗教学の総合によるフィン伝承の決定的研究となっている。
- 中本 1984: 多少エッセイ風だが、ブルターニュの伝承のうちイスの都、トリスタンとイゾー、聖杯、聖母の母、夜の洗濯女などについての紹介があり、日本では類書がななく有益。
- NÍ CHATHÁIN 1979/80: 古代アイルランドにおける豚、豚飼い、王、キリスト教聖人の関係。セム語族と異なり、豚が王権に関わる異界の聖獣とされることが注目される。
- O'BRIEN 1982: ギリシャ神話のヘレンとディオスクロイに代表されるインド・ヨーロッパ神話の太陽神の娘と天上双神の組み合わせをケルト神話にも求めようとし、
- 『マビノギ』の「マナウィンドン」中のブリデリとマナウィダンを双子神、キグファを太陽神の娘とする。決定的証明とはなっていない。
- O CATHASAIGH 1977: アイルランドの伝説的王アルトの子コルマックの生涯についての物語 *Scéla Éogain 7 Cormaic* をエリアーデ的に分析し、その英雄生涯パターンを明らかにする。
- O COILEÁIN 1977/78: 『マビノギ』の一つ「ダヴィッドの王プウィル」のプロットの構造分析。
- O'DRISCOLL 1982: 各項を見よ。
- O HEALAI 1974/76: 現代アイルランドのキリスト教と関連を持つ説話(ただしアイルランド固有のものばかりではない)に見られるモラルを分析する。
- OLMSTED 1978: 『クーリーの牛奪取』中のクー・フリンとフロイフの戦闘エピソードの古さとその位置の叙事詩中での移動を示し、併せてこのエピソードが有名なグンデストルップの大釜に描かれた場面と関係しているとする。
- O'RAHILLY 1946: 古代アイルランド伝承の歴史性と神話性をさまざまな topic について論じており、統一性は余りない。神話学プロパーは全体の五分の一程度で、究極的には全ての神話を太陽神ルグの反映として解釈しようとする(自然神話学派)傾向があるが、稀代のアイルランド学者によるだけに資料面は信頼できる。
- Ó RIAIN 1978: Lug の名は地名 Lyon にも、アイルランドの祭 Lugnasa (cf. MacNeill 1982)にも残り、大神であったと思われるが、その変容した姿がキリスト教聖人に認められるとする。
- OVAZZA 1984: 『マビノギ』の一つ「キルヒとオルウェン」やクレティアン・ドゥ・トロワの「エレクトとエニド」に見られるマボンとケルト神マポノス(くウェールズ語 map 「息子」)の関係について。マボンはマポノスの物語化された姿とする。
- OWEN 1968: アーサー王伝説がケルト神

- 話、伝説の複数の系統の中からのように生成し、最終的な形（クレティアン・ドゥ・トロワ、トーマス・マロニー等）になったかを段階毎に論ずる。多少古くなったが、基本を押さえる上で便利、有益。
- PIGGOTT 1968: 考古学的遺物中心にケルト異教を考える。堅実だがおもしろみは少ない。現代の擬ドルイド教にも言及している点はユニーク。
- POKORNY 1955: ケルト伝承の人名に類出する *cú* (gen. con-) 「犬」が内容的には他のインド・ヨーロッパ諸民族の \**lukos* / \**vṛkos* 「狼」に対応するもので、戦士階層の名であるとする。
- PONTFARCY 1984: マリ・ドゥ・フランスの物語詩 (*lais*) はマリがブルターニュで採集したと主張しているにもかかわらず、従来そのケルト性を否定されてきたが、ここではその一つ ‘*Deus Amanz*’ を分析し、その内容がケルト神話に由来するとしている。
- PUHVEL 1955: アイルランドの王即位儀礼における牝馬供儀とインドの *Ásvamedha* 祭における牝馬供儀の比較。
- Id. 1987: デュメジルの比較神話学と比較言語学によるケルト神話概説。極めてよくまとまっていて、初心者にも向く。初心者向けの体裁なので索引がなく、意図的に参考文献を数点に限っているのは残念。
- RADNER 1983: 11世紀以降に書かれたキリスト教的年代記において、僧、王などの聖的存在——デュメジルのいう第一機能——が武器、水（溺死）、火（焼死）による三重死を蒙るといふ記述が多数認められる。これはデュメジルが明らかにした第一機能存在の罪の神話——インド・イランに明確に残る——と見事に合致する。
- RAUDE 1957: アイルランドのトリックスターの存在について。cf. Mandel 1982.
- RAY 1987: イングランド南部 Wessex のストーンヘンジに代表される巨石建造物の宗教的意義、社会構造との関連。夏至の日の出や祖先崇拜と関連するが、天体観測所ではない。第一期、前3100～；第二期、2150～；第三期、2000～1500；第四期、1100。
- REES, A. 1936: アイルランド、ウェールズの聖人伝の中に英雄パターンを指摘し、異教伝統のキリスト教への摂取変容を鮮やかに示す。ロード・ラグランの影響は明らかだが、この早い時期にそれを聖人伝に応用している点は注目される。cf. HenKen 1983.
- RESS et REES 1961: ケルト宗教文化、神話、儀礼についての最も包括的著作の一つ。デュメジルの比較に力点があるので、アイルランド資料の量では Guyonvarc'h et Le Roux 1986 に劣る。
- REES, B. 1981: デュメジルとその後継者によってケルト宗教、神話の分野でなされた発見の手ぎわをよまめ。cf. Le Roux et Guyonvarc'h 1981.
- ROSS 1973: 現代アイルランドの民間伝承にもなお残る魔女存在について。彼女は王権女神やメルジヌにもつながると思われる、「ケルト世界の女性観」という大きな問題への資料となるもの。
- Id. 1981: 考古学的出土品、現代アイルランドの風習、遺跡などを文献と併用し、アイルランドの動物シンボリズム、頭のシンボリズムなどを述べる。写真多。
- Id. 1986: ケルト文化全般の概説書だが、多数の図版がケルト固有の精神的在り方をよく感じさせてくれる。
- SAYERS 1985: 『クーリーの牛奪取』の主要人物の一人フェルグスの行動は、マクロコスモスのコスモゴニーに対応するようなミクロコスモスの動きとして解読できるという。リンカーンの研究に触発されたものだが、専門家の論文で形式も整い、驚くべき博識に満ちているが、無理にコスモゴニーを作り上げようとしているとしか思われない。
- SCOTT 1930: 親指を口に入れ靈感、知恵を得るといふ宗教的行為の伝承への反映を、アイルランド、ウェールズについてま

- とめたもの。cf. Nagy 1980.
- SERGEANT 1986: 戦士集団への加入儀礼としての同性愛がケルト文化にもあったと論ずる。短いものだが、この問題については決定的な業績と思われる。
- SJOESTEDT 1940: アイルランド神話、伝説についての概説書。いささか古く、短い、共同体内部の英雄ター・フリンと外部の英雄フィンの対比など示唆的な部分が多い。
- STERCKX 1986: ケルトのコスモゴニーという従来は不可能と思われ取り上げられなかった (pace Sayers 1985) 問題を考古学的資料と伝承の両面から再建しようと試みたもの。評価は分かれそう。HR 26-4(1987), 434-5に Sayersの短評がある。
- TATLOCK 1933: 中世のウェセックス、ウェールズの伝承に類出する竜について、その起源、聖ジョージ像との関係、マンマスのジェフリーがその隆盛に果たした役割などを論ずる。
- VAN HAMEL 1934: アイルランド、ウェールズ、大陸ケルトの信仰、神名を幅広く論じた概説として有益。ただし進化論図式(呪術段階!)の強調は問題。cf. de Vries 1958.
- VENDRYES 1918: ケルト語の宗教語彙がインド・イラン語、ラテン語の場合とよく対応することを指摘し、ケルト宗教のインド・ヨーロッパ的遺産の研究に目を向けさせる契機となった古典的論文。ケルト宗教を他のインド・ヨーロッパ宗教と比較しようとする研究者には必読。
- Id. 1948: 概説書、重要。
- Id. 1952: ケルト関係を含む論文集。「ケルト人における三人物の一体性」(233-246)と「中世アイルランドにおけるドルイド教とキリスト教」(317-332)は重要。
- WAGNER 1970: 古代アイルランド語 *fír* 「真実、誓い」から発し、インド・ヨーロッパ宗教における真実/虚偽の対比強調を指摘する。ただし、それをエジプト人やメソポタミアの例との比較、同一起源にまで拡大することは、問題の焦点を曇らしてしまふように思われる。cf. Dillon 1947a; Watkins 1979.
- Id. 1975: 「水と知恵」、「ビールと王権」、「不治の病の妻」などの問題を、メソポタミア、インド・ヨーロッパの広い比較の枠内で考察。
- Id. 1977: 王権の地 *Dind Ríg* 「諸王の砦」での王一族内部の争いの物語を記した詩の古さをその詩形から証明し、その内容を分析。
- Id. 1981: 比較言語学に主として拠りながら、ケルト宗教の起源を究極的にはシュメールに求める(!)。博識と夢想の境目? 注意が必要か。
- WATKINS 1979: 『王の鏡』という教訓集に見られる「正義によって(こそ)…」という表現を他のインド・ヨーロッパ語族の類と比較し、インド・ヨーロッパ宗教全体に認められる正義・真実/虚偽の対比を指摘。cf. Dillon 1947a; Wagner 1970.
- WEBSTER 1986: 前43年以降の英国のローマによる支配のもとで、ブリトン人のケルト的宗教がどのように変化し、しかし維持されたかを考古学的資料も含め考察している。写真、図版は重要。
- WEISWEILER 1950: アイルランドの北と南での対照的な動物シンボリズムを指摘。北は牛、南は鹿。
- Id. 1954: Id. 1950をより詳しく、発展させて論じ、南の「鹿文化」を前インド・ヨーロッパ的、北の「牛文化」をインド・ヨーロッパ的 (cf. ホメロス世界) とする。エココロジーと宗教の関係を考える上で重要。
- WOOD 1982: ウェールズの『グウィオン・バハ物語』のフォークロリストによるモチーフ分析。
- ZADDY 1967: クレティアン・ドゥ・トロワのアーサー王物語の一つ、英雄roman 『エレック』の構造分析。

\*本篇は文部省科学研究費（奨励研究（A）  
「古代ヨーロッパの印欧語族諸宗教におけ  
る神話と儀礼」）による研究成果の一部で  
ある。